巻　頭　言

東京大学教授　伊藤　学

技報の発刊を心からお慶び申し上げます。この種の刊行物は、その組織における成果、従ってその組織の技術レベルを記録に残る形で世に問うものであり、その組織に属する人びとにとっては、常日頃の絶ゆまぬ研鑽の成果が陽の目を見る場を与えられるわけで、ひいては技術力の更なる向上にもつながるものと考えるからです。

工学の分野においても、その成果を〝もの〟として世に示すだけでなく、書かれた記録として残されることは非常に大切なことではないかと思います。一昨年、私は土木学会の定期刊行物の検討を仰せつかり、論文集の改革を中心とした提言のとりまとめにあたり、本年度からその線に沿った新しい姿が実施に移されております。その一つの契機はそれまでの論文集の内容、投稿者層にいささか偏りがあるとの指摘でありました。すなわち、いわゆる研究者による数式や実験中心の論文に比重が偏っていたということです。もちろん、この種の論文に大きな価値があることをその分野に身を置く私は否定するものではありませんが、実際に〝もの〟を創ることを究極の目標とする工学においては、設計や施工にかかわる成果、独創的な評論なども立派な論文であるはずです。別に専門雑誌が存在し、これらにはその種の報告、論文が収録される機会はありますが、商業誌となればやはり性格もそれなりに限定されますし、とくに土木の分野では発注者であるお役所への気がね、あるいはそちらの側からの制約といったものが顕わにうかがえます。その仕事に実際に携わり苦労をなめた技術者が、その人の名で（ということは責任で）、成果を世に問うことがわれわれの世界ではもっと推し進められるべきではないでしょうか。おそらく技報はそのような機会を増してくれる絶好の場となるでありましょう。更に、そのような機会を与えられることにより、その人はまた次なるチャンスを目ざして一層の向上に励むでありましょう。

ところで、こと鋼構造に関しては、われわれは諸外国の鋼構造技術者が羨む環境に置かれてきました。国情によるとはいえ、短径間の橋、低層の建築にさえこれ程鋼構造が使われている例は先進諸外国にも見当たりません。おまけに、現時点では本四架橋がクライマックス、京浜・中京・阪神の各地域で世界屈指の大規模な鋼斜張橋が次々と着手され、あるいは計画中とあって、長大橋は今や花ざかりの盛況であります。しかしその後のこととなると、さしものわが国でもお互い顔を見合わざるを得ません。では海外に目を向けてはといっても、われわれの分野では遺憾ながらといった方がよいのか、まだ貿易摩擦といった話はありませんし、将来もそのような事態に立ち至る可能性は薄いようです。これにはそれなりの理由があるということは、私より皆様方の方がご存知でしょう。

しかしこのような状況のもとでも、他の工学分野と同じく、技術の面での国際化は時代の流れでもありますし、必要なことだと思います。日本には随分すぐれた技術があるようだがその実態はよく分からぬといった状況では、いざというとき何らかの摩擦を招きかねませんし、また、そのようなすぐれた中身を分かってもらっていれば、いざというとき、われわれにとって大きなプラスになるのではないでしょうか。このような意味あいから、技報に盛られる内容のうちの然るべきものについては、是非国際的な発表の場にも進出していただきたいものです。このことは国際会議の場でということも当然含みますが、前述の学会論文集でも、英文による投稿を歓迎して、それらを別に集めたものを海外に送り出すといった方式を発足させる計画ですし、発展途上国に対してはわれわれの鋼構造技術の転移をはかるセミナーなどを企画することも考えています。このような面でも皆様方のご協力をお願いいたします。

継続は力なりと申します。せっかくの技報の発刊、どうか質・量ともに末永く充実を続けられ、斯界の発展に寄与されることを祈ってやみません。